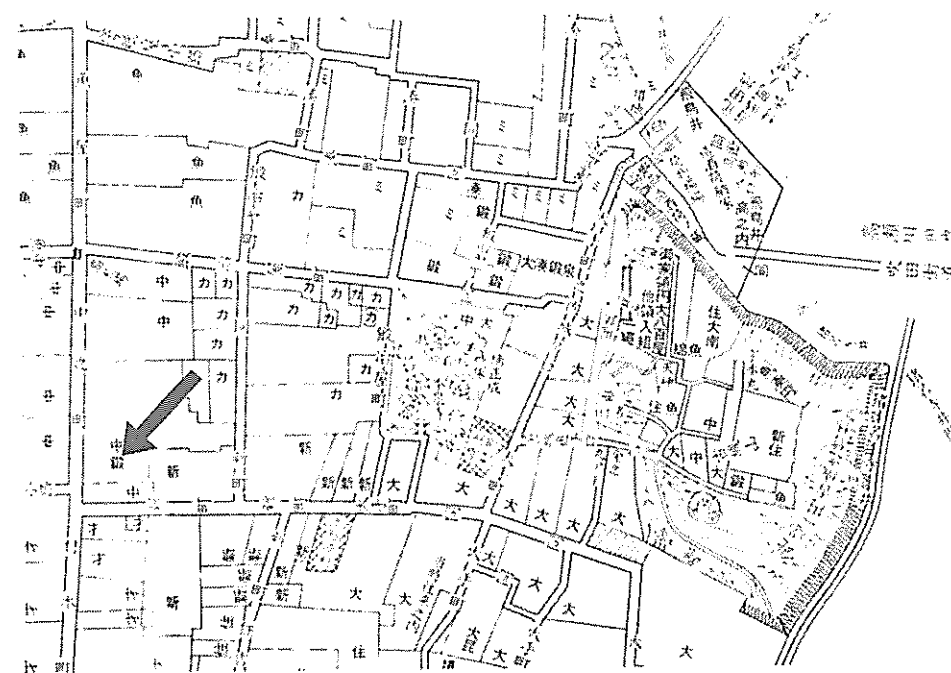


平成 20 年 4 月 19 日(土)

現地説明会 資料

有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第 316 次調査



「天保 15 年伊丹郷町分間絵図」解説図

八木哲浩編集・解説『伊丹古絵図集成』(伊丹市立博物館 1982 年) より部分掲載



伊丹市教育委員会



有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第 316 次調査

現在，調査中の有岡城跡・伊丹郷町遺跡第 316 次調査地点において，江戸時代の酒蔵跡や，戦国時代の有岡城の堀跡を発見しました。

調査はまだ継続中ですが，その中間成果を報告いたします。

1. 遺跡名 有岡城跡・伊丹郷町遺跡
2. 調査回数 第 316 次調査
3. 調査原因 店舗（複合施設）建設に伴う発掘調査
4. 調査地 伊丹市伊丹 2 丁目地内
5. 調査期間 平成 19 年 12 月 19 日～平成 20 年 7 月（現在調査継続中）
6. 調査面積 1,815 m²（うち現在の調査は西側半分）
7. 調査主体 伊丹市教育委員会



堀 SF01（北より撮影） 石組み溝下で SF01 を検出しました。

遺跡の概要

本遺跡からは、古くは縄文・弥生・古墳時代の遺構・遺物が検出されますが、主たる時代は鎌倉時代～江戸時代です。この間は、伊丹氏及び荒木村重が支配していた鎌倉時代～戦国時代（伊丹城・有岡城期）、有岡城廃城後、酒造業で栄えた江戸時代（伊丹郷町期）に分けられます。この2時期の遺構の概要について、以下に説明します。

* 伊丹城・有岡城期

在地武士の伊丹氏の居城である「伊丹城」は鎌倉時代末期には存在したと考えられています。永禄11年（1568）に織田信長が入京すると、伊丹氏は信長方につき、「摂津三守護」の一人になりますが、荒木村重によって天正2年（1574）に落城します。

荒木村重は伊丹城を「有岡城」と改め、侍町と町屋も含めた全体を堀と土塁で取り囲んだ「惣構え」の城に大改造したと考えられています。

中世の城では、家臣団の居住地や町屋地域は、城と離れた所がありました。それが次第に近接するようになり、室町時代末期には城と町を堀や土塁などの防御施設によって囲む「惣構え」の城が造られ始めます。有岡城は「惣構え」の城としては早い段階で成立した城として、重要視されています。

有岡城の構造は、「信長公記」の記述や江戸時代の絵図などから、主郭は現在の JR 伊丹駅付近とされ、その西側に侍町、さらにその西側一帯に町民の住む町が広がっていたことがわかっています。

主郭部の発掘調査では、主郭部の周囲に内堀と土塁が設けられていることがわかり、内堀の規模は幅約 15m、深さ約 2.5m以上で、石垣はなく、素掘りの堀であることも確認されました。さらに、主郭部西側にあった侍町の発掘調査では堀跡を数カ所検出し、幾重にも堀を巡らしていたことがわかりました。また、江戸時代に描かれた「文禄伊丹之図」（P5 / 第3図）では、伊丹郷町の中央部を南北に流れる「大溝筋」が描かれ、それに平行するように土塁が表現されていることから、侍町と城下町を区画する防御施設が設けられていたと考えられていました。平成11年の県道伊丹停車場線の発掘調査や、平成15年の第276次調査（現二トリ）で、大溝筋の直下から巨大な堀を検出し、その実態が明らかになりました。

大溝筋は、当初は幅約 6m、深さ 2.7mの堀で、形状は逆台形を呈する箱堀であることもわかりました。さらに、平成 18 年度におこなった第 305 次・第 310 次調査では、大溝筋がさらに南側に延びていることがわかりました（P4 / 第 2 図）。

大溝筋は江戸前期には埋め戻され、その上層に新たに石組溝が設けられて、現代まで使用されていました。

また、検出した堀跡は現在の地割に平行するものが多く、伊丹郷町内の地割は有岡城期から改変されていないこともわかりました。

* 伊丹郷町期

有岡城は天正 7 年（1579）に信長に攻められ、落城します。その後、天正 11 年（1583）に廃城となり、残された城下町は江戸時代以降、酒造業を中心とした在郷町として発展します。

伊丹郷町を構成する 15 ヲ村のうち伊丹村は、当初は材木町・鍋屋町など 15 の町で形成されていました。町場は次第に拡張し、江戸中期には 27 町に増えます。

発掘調査では、町屋のようすをうかがえる遺構・遺物が多く検出されます。その中で、伊丹郷町の主産業であった酒造業に関する遺構も多く検出されます。

酒蔵は江戸前期には現在の産業道路（本町通り）周辺に点在しており、4 × 5 間以上の礎石建物、釜場や搾り場などの酒造遺構が検出されます。搾り場は単基式のものです。

江戸中期には産業道路の西側・南側にある町屋地域にも広がり、礎石建物も 6 × 6 間以上と大型化します。それに伴い、礎石下には数段の根石を設けるようになります。搾り場も単式に加えて 2 基連式のものが出現し、酒造業の発展が遺構からもうかがえます。

江戸後期になると、有岡城廃城後に畑地となっていた大溝筋より東側の地域にも酒蔵が建てられ、伊丹郷町内に広く点在するようになります。建物はさらに大型化して、6 × 10 間以上となり、4 基一体の搾り場などが出現して、酒造業がさらなる発展期を迎えたことがうかがえます。

文献資料から、伊丹郷町の酒造業は、元禄年間から享保年間（17 世紀後半～18 世紀初頭）、文化・文政年間（19 世紀前半）に盛期を迎えたことがわかっており、発掘調査成果と一致します。

調査成果

第 316 次調査地点は、有岡城主郭部の西南約 250m に位置し、有岡城期では侍町と町屋地区にまたがる地域です。また、江戸時代は伊丹村のうち「中之町」・「鍛冶屋町」にあたります（表紙及び P 5 / 第 3・4 図）。

本調査区には、小西酒造株式会社の酒蔵である「万歳蔵」が建っていました。19 世紀中期に建てられたと考えられています。

発掘調査は継続中ですが、現在までに判明した成果について説明します。

* 伊丹城・有岡城期（第 4 次面） → P 7 / 第 8 図参照

「大溝筋」(堀)とは異なる長さ 50m 以上、幅 6.5m、深さ 3 m の新しい堀を発見しました。

有岡城期の遺構としては、堀跡や一石五輪塔を利用した溝などを検出しています。

堀跡 (SF01) は、調査区中央を北壁から南壁まで南北方向に伸びます。規模は、長さ約 50 m 以上、幅約 6.5m、深さ 3 m で、断面は逆台形状を呈します。出土遺物は、備前焼甕、中国製青花皿、唐津焼皿などの陶磁器や、椀などの漆器、鹿・猪・スッポンなどの動物の骨などです。陶磁器などの出土遺物から、有岡城落城後の 16 世紀末～17 世紀初頭には埋め戻されていることがわかりました。

この堀跡は、調査区北側に位置する第 276 次調査(現二トリ)で検出した「大溝筋」と考えられる堀跡と主軸が異なるため、別の堀跡と考えられます。また、北側隣地の第 317 次調査では大溝筋より西側で 2 条の堀跡が検出されていますが、これらとも異なると考えられます。

今回検出した堀跡は、絵図などの資料には記載されていない堀跡であり、さらに、第 317 次調査の 2 条の堀とも同一でないことから、本調査地周辺の町屋地区にも有岡城期の堀が複数存在していたことがわかりました。これは本調査地点が城を防御するうえで重要な地域であることを示す新たな発見となりました。

堀跡以外には、一石五輪塔を溝の側石として転用した溝 (SD31) を検出しました。

溝跡 (SD31) は、調査区南西を東西方向に伸びます。規模は、長さ 8 m 以上、幅 0.8m、深さ 0.5m で、断面は U 字型を呈します。溝の一部は、一石五輪塔を溝の側石として転用していました。本調査区では、このような転用例を 2 ヶ所検出しています (P 6 / 第 6 図 SD19、P 7 / 第 7 図 SD21)。

* 伊丹郷町期（第1・2・3次面） → P 6・7 / 第5・6・7図参照

江戸時代（伊丹郷町期）の酒蔵（礎石建物）と、その内部にあった酒造遺構「搾り場（^{ふなば}槽場）」と「釜場」を発見しました。

当調査地には、弘化4年(1847)の祈禱札がある「万歳蔵」が建っていました。

第1次面では、調査区全域で礎石を数基検出しました。礎石は、数段の根石を積んでおり、大型建物に対応するためと考えられます。さらに、この建物内からは、搾り場（=槽場）遺構（男柱と搾った酒を受ける垂壺の組み合わせ）を8基と、酒造用の「かまど」1基とレンガ積み「かまど」1基を検出しました。このことから、この大型の礎石建物が酒蔵であったことがわかりました。

搾り場（槽場）

検出された8基の搾り場遺構は、すべて「1槽さし単基型」です。埋土から出土した遺物の年代から、これらの搾り場遺構は18世紀末～19世紀前半、19世紀中頃のものであると考えられます。

これらより古い酒造遺構は検出されず、本調査地点には18世紀末以降に酒蔵が建てられたことがわかりました。

釜場

酒造用のカマドは、燃焼部は2ヵ所設けられ、火を燃やす焚き口は地下式です。

レンガカマド（SV01）の規模は、長辺6m、短辺5.5mの大型カマドで、大きさから酒造用のカマドと考えられます。また、焼成室の上部には煙道が設けられ、その先には屋外に流れるような煙突跡も検出されました。レンガ積みであることや、レンガを積む際に接着剤として漆喰を使用することから、明治時代以降（19世紀後半～20世紀前半）と考えられ、「万歳蔵」に伴うカマドと考えられます。

カマド3（SV03）の規模は長辺3.5m、短辺2.9mです。構造は2連式の半地下式で、焼成部は粘土張で、焚き口には礫と瓦を設置しています。カマド内から出土した遺物から江戸時代後半と考えられ、「万歳蔵」より一時期古い時期のものであることがわかりました。

おわりに

今回の発掘調査では、万歳蔵より前の18世紀末から酒蔵があったことがわかりました。その酒蔵については、残念なことに古文書などでは該当する酒造家はわかっていません。今後の研究課題です。

調査は今も継続中で、本調査区の詳細はまだわかりませんが、今回検出した堀跡は、第317次調査で検出された2条の堀跡に接続しないと考えられ、さらに、これら堀跡とは規模が異なり、検出長50m以上、幅6.5mにおよぶ大型の堀跡でありました。

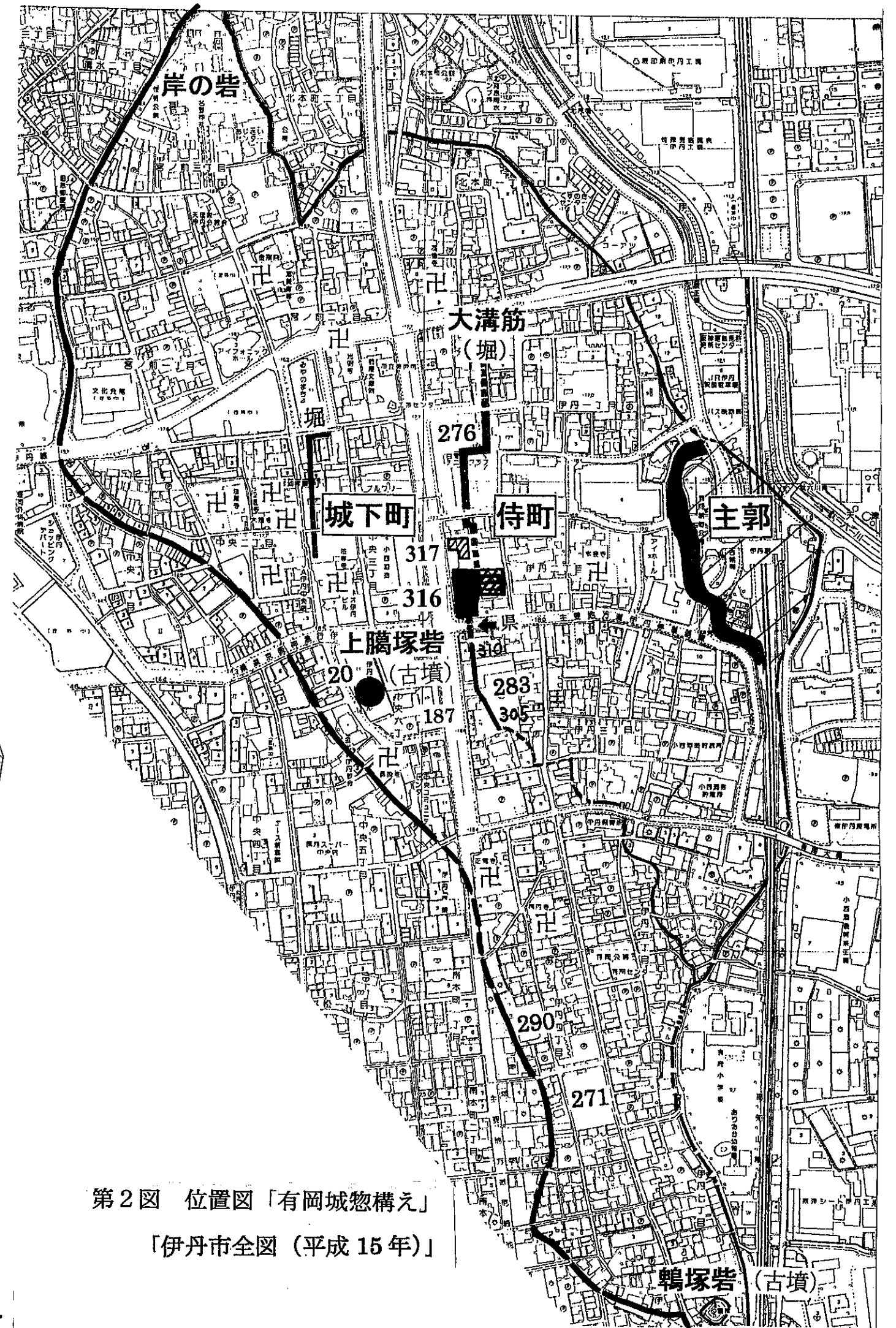
これらから町屋地区側にも複数の堀を設けていたこととなります。これは有岡城期の構造を知る上での好資料になると考えられます。



スッポン出土状況（堀 SF01 内）



第1図 位置図「有岡城跡・伊丹郷町遺跡」

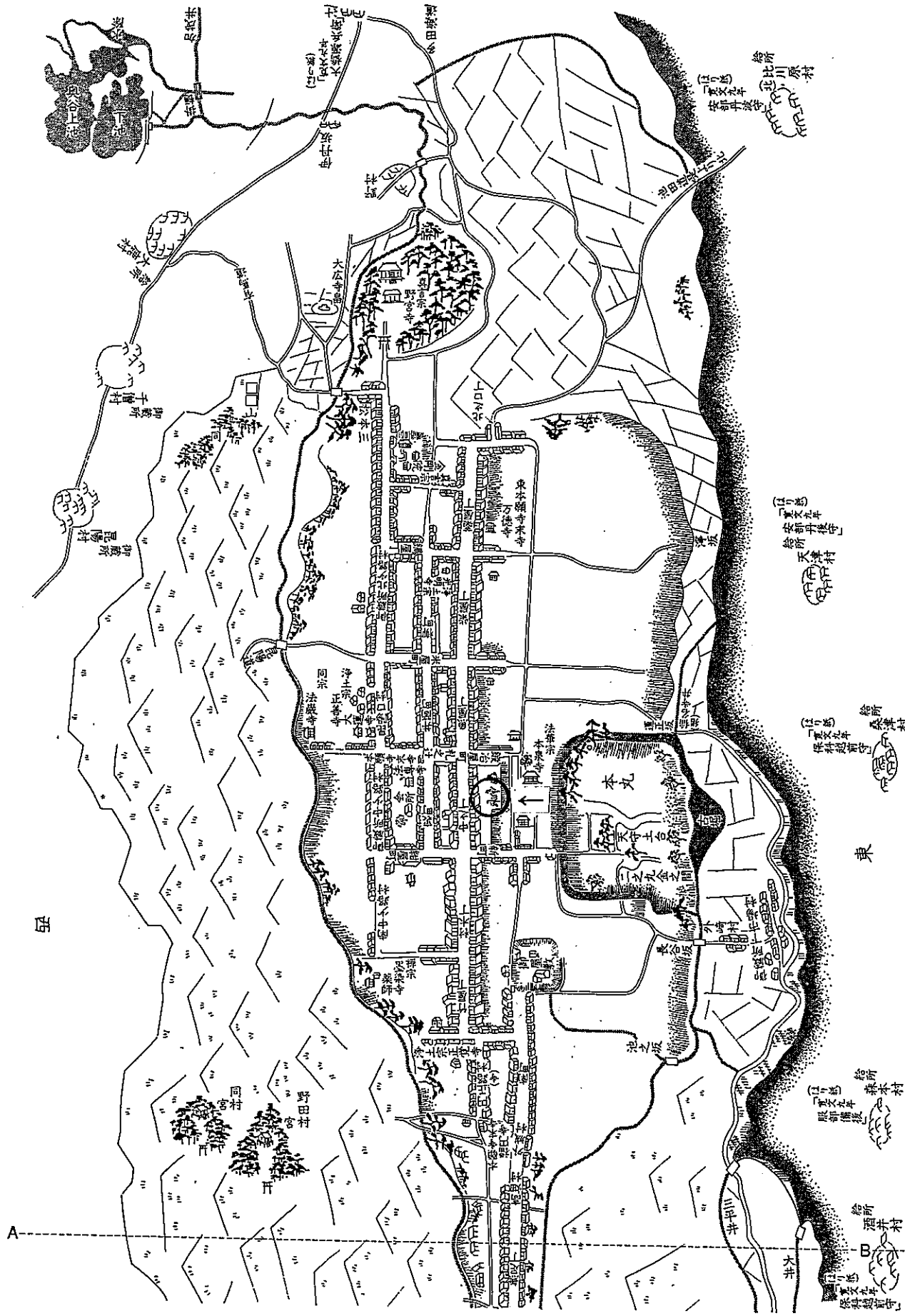


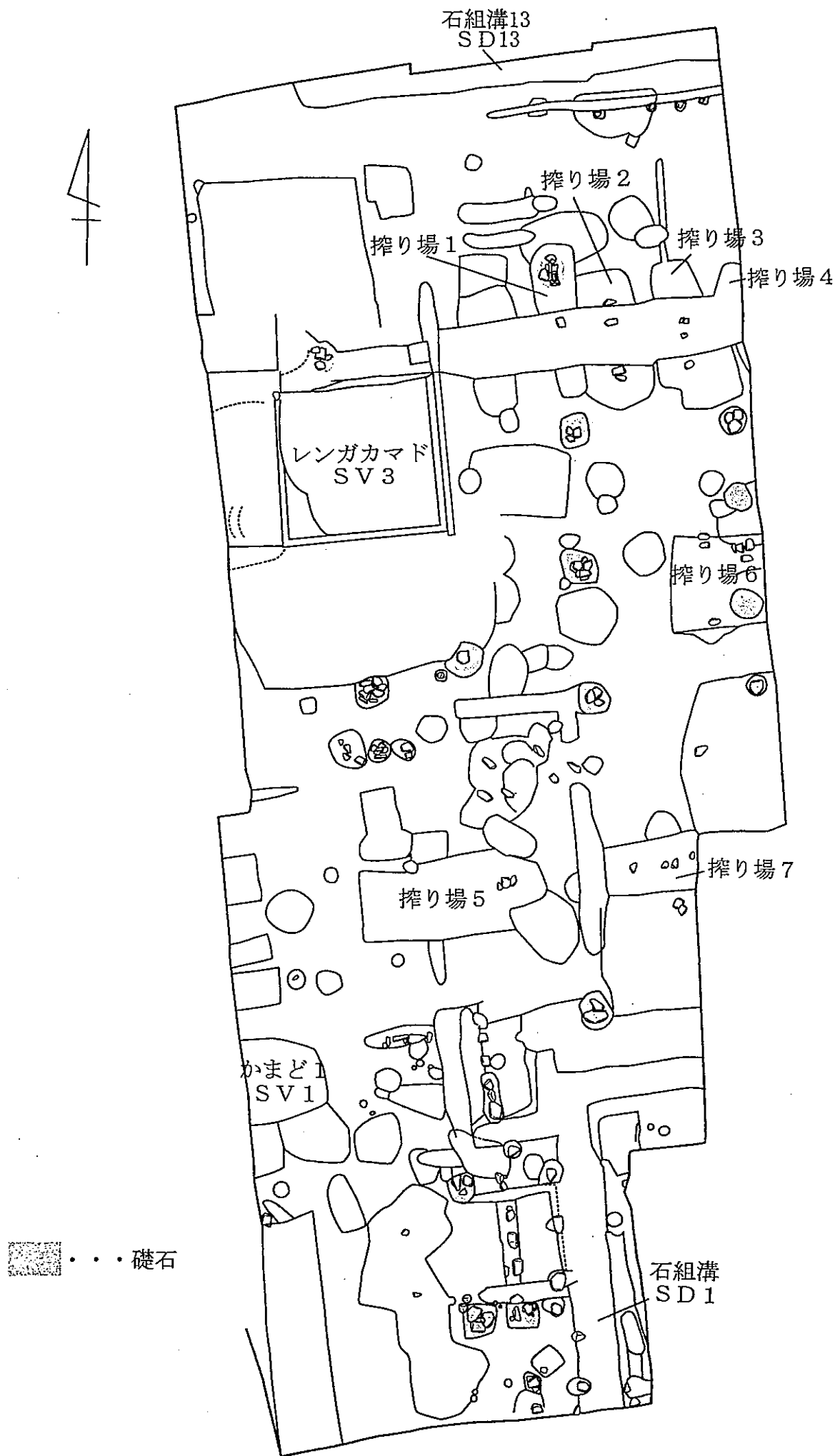
第2図 位置図「有岡城惣構え」
「伊丹市全図(平成15年)」

第3図 『文禄伊丹之図』（「伊丹古絵図集成」より抜粋）

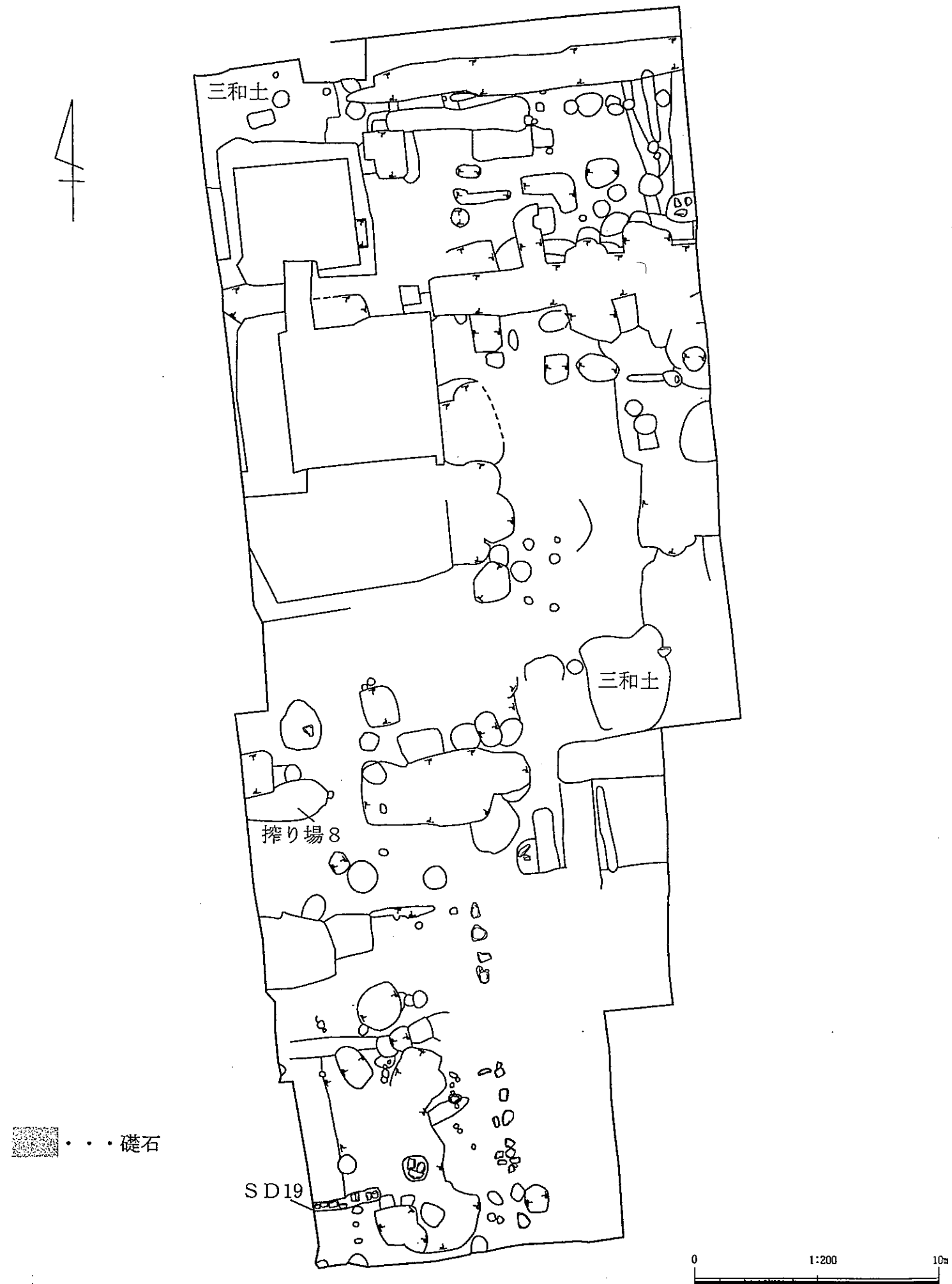


第4図 『寛文九年伊丹郷町絵図』（「伊丹古絵図集成」より抜粋）





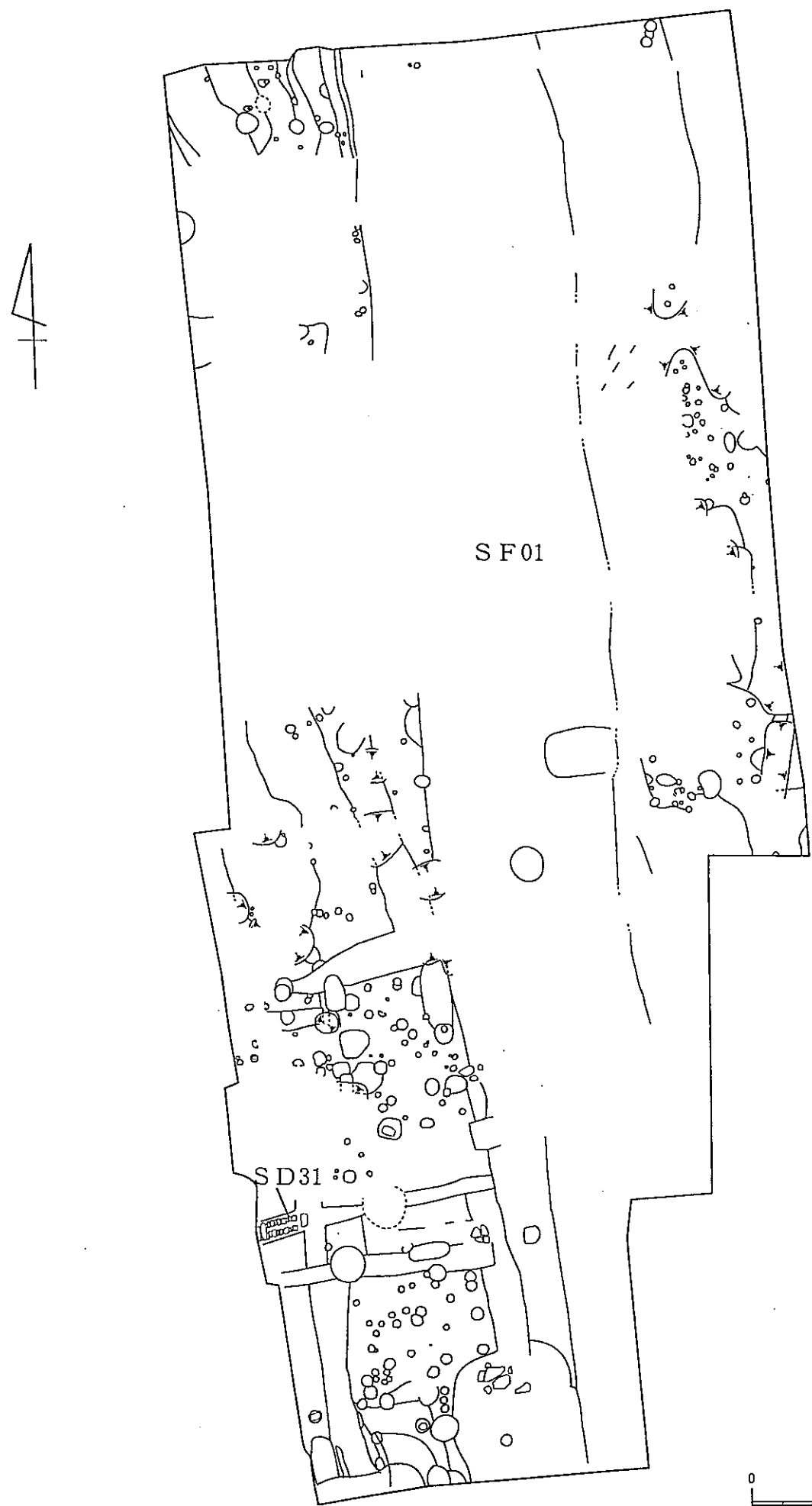
第5図 第1次面 平面図 (S=1/200)



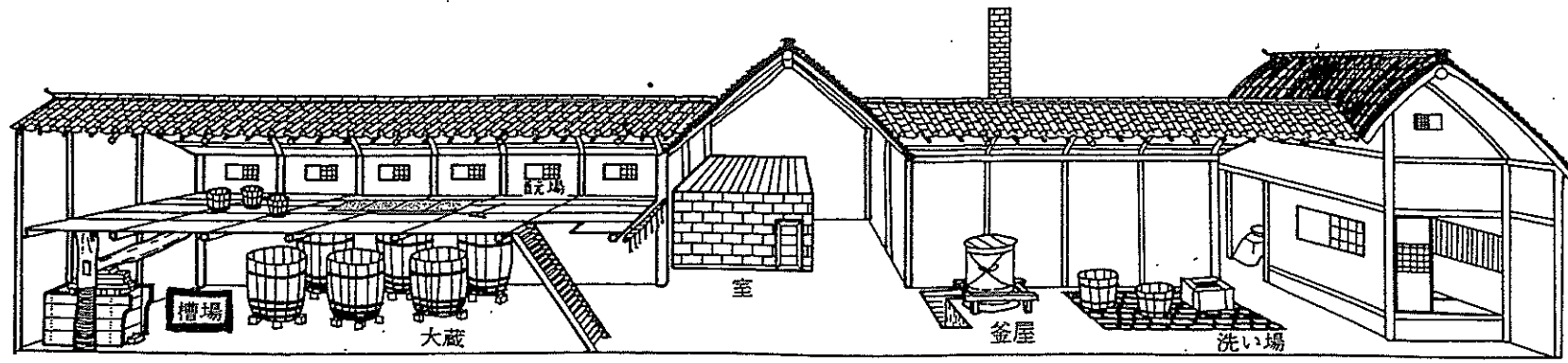
第6図 第2次面 平面図 (S=1/200)



第7图 第3次面 平面图 (S=1/200)

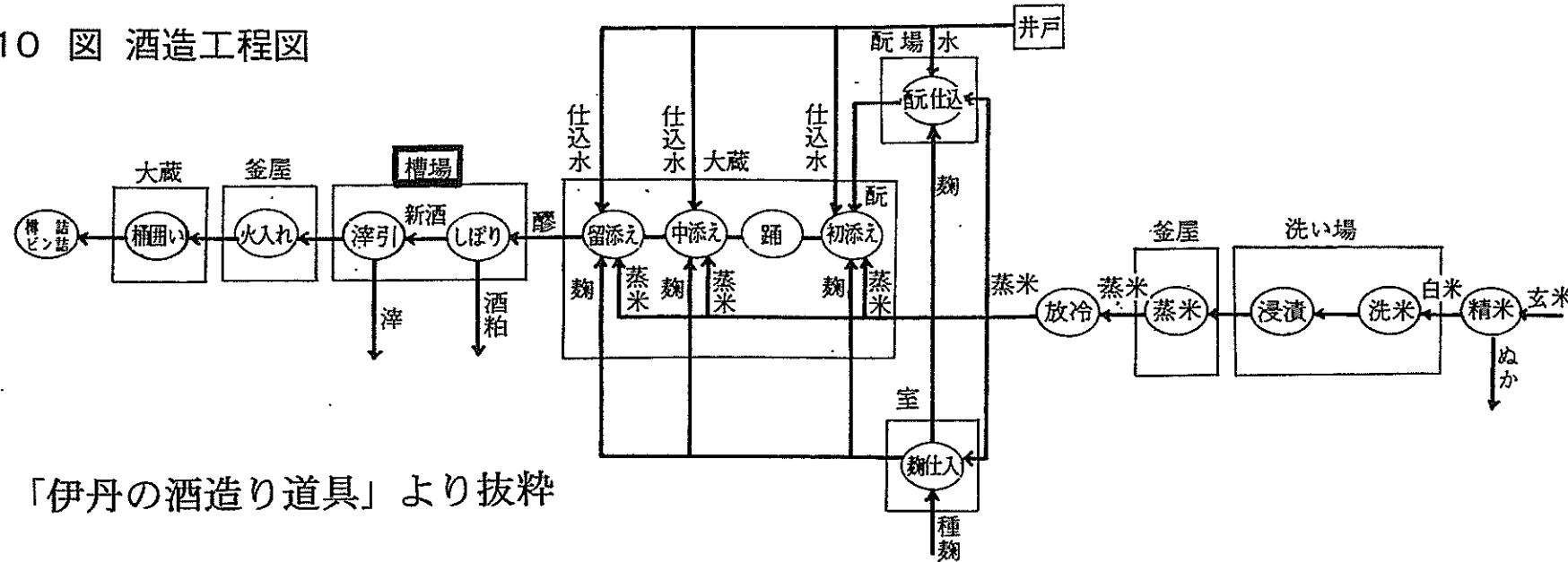


第8图 第4次面 平面图 (S=1/200)



第 9 図 酒蔵模式図

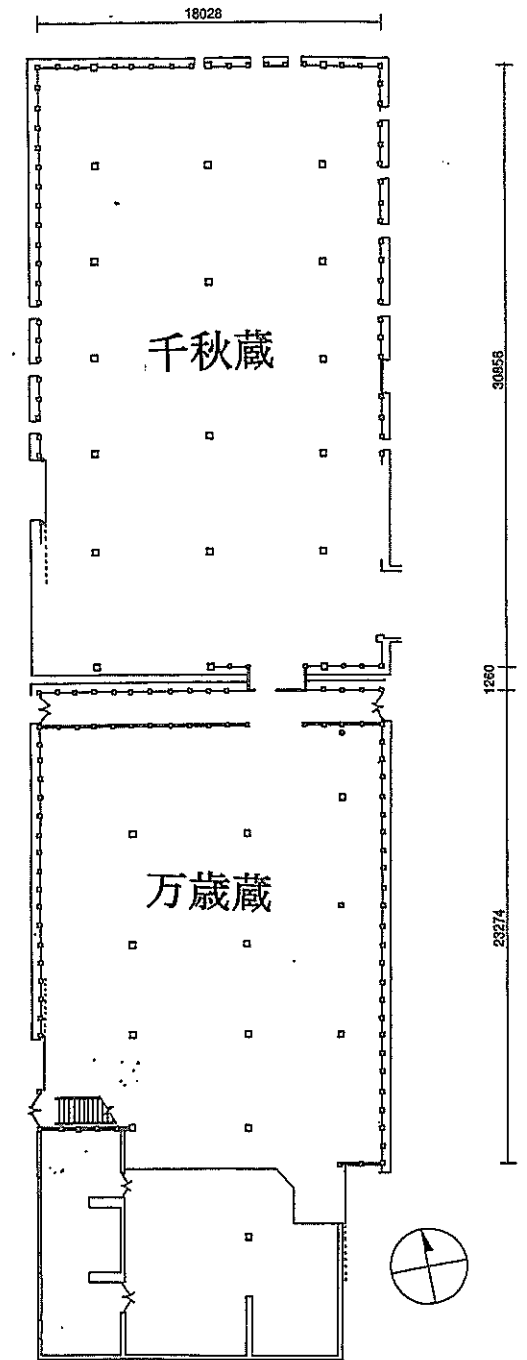
第 10 図 酒造工程図



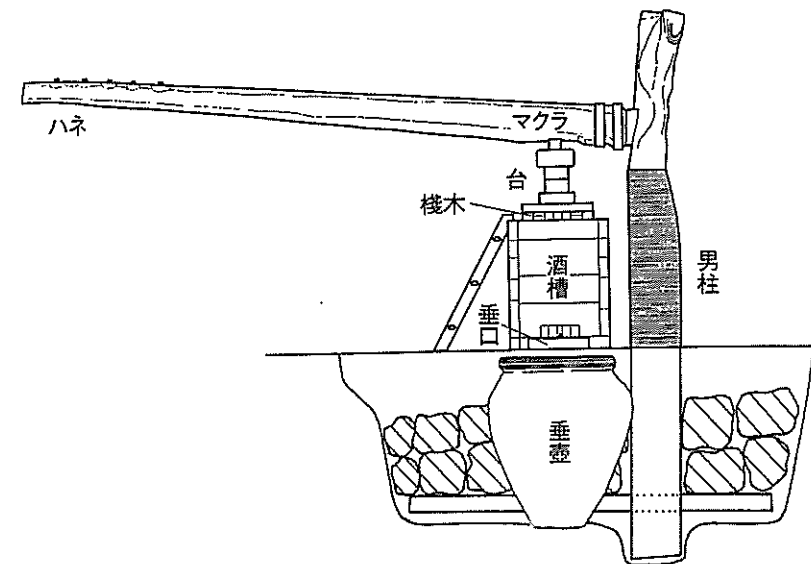
「伊丹の酒造り道具」より抜粋



第 11 図 麹づくり (『日本山海名産図会』より)



小西酒造(株) 万歳号号蔵・千秋蔵平面図
第 13 図 『伊丹の歴史的建造物』より抜粋



第 12 図 男柱遺構復元図

『重要文化財 旧岡田家住宅保存修理工事報告書』より抜粋